

Re\_Born

かぶらやこうし  
鋪谷嘴矢

テレビでは、新年のカウントダウンをやっていた。

3, 2, 1 ハッピーニューイヤー……

山岡咲妃は、大はしやぎするタレントたちにもコンを向け、思い切り電源オフボタンを押した。

画面は消え、部屋は静かになる。

ふう、とため息をついたとたん携帯のコール音が鳴った。

以前は、流行りの曲を使っていたが、二年ほど前から、ただの電子音にしてある。その方が、人の多い場所では自分のコールを判別しやすいのだ。

携帯の液晶には、浅茅将大と出ていた。

「はい」

「新年おめでどう、咲妃ちゃん」

耳のそばで、脳天気にもるい声が響いた。

「おめでたくないわよ」

つい咲妃は尖った声で答えてしまう。

女も三十半ばを過ぎると、新年というのは、次の誕生日への一里塚、という気になってくる。おまけに、咲妃は寅年生まれ。今年は年女なのだ。

「どうしたの。咲妃ちゃん」

将大が心配そうな声を出した。

六つ年下で、三人兄弟の末っ子である彼は、驚くほど甘えん坊で弟性格なのだ。

「なんでもないわ。おめでどう」

「そう——ところで咲妃ちゃん」

心配そうな声を出したあとで、すぐに明るい声を出せる将大がうらやましい。

「なによ」

「咲妃ちゃん、寅年生まれだよね」

「気にしてるんだから、いわないでよ」

「何を気にするんだよ。カッコいいよ。虎なんだから。俺なんかサルだよ、サル」

どちらかというと、サルというよりゴリラという感じの将大の大きな体を思い出して、咲妃の口元は少しだけ緩んだ。

「それで」

しかし口調は冷たいままにする。将大の軽口につきあっていたら、いくら時間があっても足りない。

「年女だから？」

「善光寺って知ってるでしょ」

「長野の？」

「そう」

「寅年生まれと何の関係があるのよ」

「まあまあ、あそこに胎内巡りっていうのがあるでしょう」

「そういえば、学生時代に長野へいった時に入ったことがある。

お堂の中で、真っ暗な通路を歩くのだった。

「そうそう、それと同じものが信貴山にあるんだ。知ってる？」

「信貴山って……」

「そう、虎のお寺。咲妃ちゃんにぴったりでしょう」

奈良の信貴山は知っている。特に、今年、テレビでも、寅年に因んで何度も紹介されていた。

「そこに行かない？明日にでも」

「明日……」

「何か予定は入ってる？仕事とか？」

「仕事なんかあるわけじゃない！」

つい尖った声を出してから、自己嫌悪に陥った。

咲妃は、ある出版社の記者をしている。

自分では、ジャーナリストとしての自負もある。

しかし、年末、社をあげての「政治家汚職報道」で、ひとり先走った記事を書いて、ひと月の自宅謹慎中なのだ。

「ごめん、ごめん。だったら気分転換に行こうよ」

「でも……」

寒い中、わざわざ出かけて、お年寄りに混じって暗い廊下を歩くのは気が進まない。

「そういうと、」

「いやいや、それは善光寺のでしょう。信貴山のは、もっとこぢんまりしてるし、若い人も多いんだ」

「え、ほんと？」

「恋人同士が手をつなぎ、心をひとつにして暗い道を歩いていって、暗闇の中に照らされた小さな御仏を見つける。大願成就もアリという噂だよ」

「御仏？ 鍵をつかむんじゃないの？」

たしか、善光寺はそうだったはずだ。

「そーいや鍵もあったかな。学生時代に行ったきりだから忘れた」

「その時も、女の子と一緒にだったのね」

「え、ま、まあ昔の話だよ。ね、いいでしょう。車で迎えに行くから」

結局、将大に押し切られ、信貴山に行くことになってしまった。

電話を切ってしばらく、咲妃は呆然としていた。

机の上に乗ったノートパソコンを見る。

つい二週間前までは取材に走りまわり、毎晩、遅くまでキーボードを叩いていたのだ。

謹慎処分を受けてから、一度もパソコンは開いていない。

手ひどい失敗をしてしまったから、咲妃は文章を書くのが怖くなっ  
てしまった。

確かに、今回は、自分の失敗だった。

それによって、会社に迷惑を掛け、何人もの人を傷つけてしまった。

今まで人生を満たしていた充実感は去ってしまい、残ったのは、仕事の失敗による挫折感と自分の年齢、年女であること――

『友だち以上恋人未満』という、年下の将大が時折みせる幼さ、頼りなさも、可愛いというより、がっかりすることが多くなっている。

それらが、一度に咲妃の上にのしかかってきて、彼女は押しつぶされそうになっていたのだ。

翌日は、咲妃の気分と裏腹に、からりと晴れた良い天気だった。

風もなんだか暖かい。

時間通りに迎えにきた将大は、上機嫌で車を運転していた。

寺は、思ったより空いていた。

夜にお参りする人が多かったからかもしれない。

巨大な張り子の虎を横目を通り過ぎ、迷路のような参道を、幾度も曲がって、徐々に上へと登っていく。

急な階段を上がりきると、ぱっと視界が広がった。

板敷きのテラスといった造りは清水の舞台に似ている。

遙か彼方には奈良の街並みが霞んでいた。

「さあ、こつちこつち」

お参りを済ませると、すぐに将大が咲妃の手を引いて本堂横に連れて行った。

「俺さ、実は、咲妃ちゃんと、ここに入る夢を見たんだよね」

そういいながら、将大は、お金を払い、しおりを受け取った。

お参りする人は結構いるものの、善光寺と違って胎内巡りをする人は、ほとんどいないようだ。

「そうそう、こうだった。変わってないなあ。こつちだよ」

将大は、勝手知ったるように、お堂の中を先に進んでいく。

「暗いから足下にご注意を」

作務衣を着た案内人の声に送られて、咲妃と将大は「胎内巡り入り口」と書かれた階段を下りていった。

階段の最後には、黒い緞帳が張られていた。

それをくぐると、まったくの暗闇になる。

それが演出なのか、どこからか読経が聞こえてくる。

「大丈夫？俺がしっかり手を掴んでいるからね」

すぐ近くで将大がいった。

声は聞こえるが、姿はまったく見えない。

「うまくできてるよな。こうやって真つ暗な中を歩いて、突然、御仏が浮かんで見えたら信仰も高まるというもんだ」

将大の軽口にも、咲妃はすぐに答えられなかった。

それほど、圧倒的に濃い闇の暗さだったのだ。

生まれてから、これほど真つ暗な中を歩いたことはないような気がする。

咲妃は、ただ、将大とつないだ左手と壁に当てた右手だけを頼りに道を進んでいた。

「……ちゃん」

「え？」

「サキちゃん」

読経に混じって女の子の声が聞こえる。

「ねえ、今、女の子の声が聞こえなかった？」

「いや、何も聞こえないよ。読経しか」

「へんねえ」

「——サキちゃん——」

「ほら、やっぱり聞こえ、あつ」

「どういうわけか、足がもつれて、咲妃は前のめりに、倒れてしまった。」

将大とつないだ手も離れる。

「ねえ、どこにいるの。わたしこけちゃった」

咲妃は暗闇に尋ねた。

だが将大は答えない。

「ふざけないで——将大」

墨を流したような暗闇の中だ。

不安と孤独が押し寄せてくる。

咲妃は、パニックになりかかると必死で抑えた。

将大の奴、絶対許さないんだから。

「サキちゃん」

ふたたび、今度は、はっきりと耳元で女の子の声が聞こえた。

「誰？」

振り返ると、突然、顔に光を感じた。

まぶしさに耐え、ゆっくりと目を開けると、咲妃は明るい光の中にいた。

違和感や恐怖を感じるより前に、まず、胸一杯に広がったのは、なつかしさだった。

いま、咲妃の前に広がっているのは、子供の頃遊んだ公園だったのだ。

「咲妃ちゃん。大丈夫」

目の前に女の子が立っている。小学校低学年ぐらいだろう。

「えっ！」

咲妃は驚いた。

その子がマホちゃんだったからだ。

マホちゃん。フルネームは佐々木真穂。

咲妃の子供の時の友だちだ。

「大丈夫。あたし、押し倒されたけど、タケトのボタンをちぎってやったよ！」

自分の意思とは関わりなく、咲妃の口が動いてそう答える。

その声が、なんだか幼い。

——まさか

咲妃は自分の手を見た。小さい。子供の手だ。どうやら、咲妃も小学生になっているらしい。

——ははあ

子供の咲妃の後ろで、大人の咲妃が頷いた。

これは夢なんだ。

でも、いつから夢なんだろう。たしか、将大と一緒に胎内巡りをしていたはずなのに。

そう考えながらも、不思議に思う気持ちより咲妃の心を揺らしたのは、タケトという名前だった。

和田健人。

たしか、父親が市議員でセメント会社の社長だった。市の実力者だ。

タケト自身もワガママいっぱいのいじめっ子だった。

友だちも親も、先生でさえ、タケトの顔色ばかり伺っていた。

タケトは、誰に対しても悪ガキだったが、マホちゃんに対しては、特に激しいイジメをしていた。

今ならわかる。おそらくタケトはマホちゃんが好きだったのだ。

だけど、分かったって言い訳にはならない。

あの頃、マホちゃんは本当に困っていたのだから。

いつも、わたし一人が、タケトからマホちゃんを守っていた。

「いつかね。マホちゃん」

子供の咲妃がいう。

「大人になったら、あたし、新聞記者になって、タケトのお父さんみたいな悪い人をやっつける。それで、マホちゃんみたいな人を守るんだ」

子供ながらに、タケトの父親の悪い噂は聞いていたのだった。

「サキちゃんならきつとなれるよ。いまでもわたしを守ってくれてるんだもの」

「絶対なるから！マホちゃんも守ってあげる」

ああ！

自分の口が、そう断言するの聞いて、咲妃は頭を殴られたような衝撃を受けていた。

そう、わたしは、この日を覚えている。

そうだったのだ。

幼い日の、この出来事が、わたしをずっとジャーナリズムへと駆り立て続ける原動力なのだった。

わたしの気持ちの原点にあるのは、弱い立場の人たちの気持ちを代弁し守ること。

それを忘れて、何を後ろ向きに失敗を悔やんでいたのだろう。

でも……もし、これがあの日なら——

「じゃ、サキちゃん。わたし帰るね」

マホちゃんは、にっこり笑うと、小さく手を振った。

「じゃあ、また明日」

子供のサキも、そういつて手を振る。

ちよつと待って！

もう少しお話させて。顔を見せて——大人の咲妃は思わず叫ぶ。

マホちゃんは、夕日で細長く伸びた影と共に公園を小走りに出て行く。何度も何度も、振り返って、その度に手を振りながら。

——マホちゃん！

大人の咲妃は知っていた。

この日から数日後、マホちゃんが交通事故で死んでしまうことを。

「……ちゃん、咲妃ちゃん」

肩を揺すられて意識がはつきりした。

かすかな光の中に、ぼんやりと将大の顔が浮かんでいる。

「どうしたの。突然、黙り込んで動かなくなるから、びっくりしたよ」

「わたし、転ばなかった？」

「いや。ほら、これが仏様だよって、俺がいたら、突然おかしくなつたんじゃないか」

将大が示す先、木の格子扉の向こう側に仏像があった。

「大丈夫。もう平気だから」



咲妃は、将大の手を肩から外すと、正面から仏像を見た。

「鍵だよ、ほら触って」

格子扉には、大きな錠前が掛けてある。

咲妃は、それに触れ、仏様に手を合わせた。

「あーびつくりしたな。本当に咲妃ちゃん、大丈夫。無理に連れて来たから、俺、責任感じちゃうよ」

胎内巡りから出ると、まぶしい陽光の中で将大がいった。

咲妃は、大きな将大の背中を、ドン、と叩く。

「わたしは大丈夫。本当にね。生まれ変わったみたいな気分。すごくスッキリしてるの。さすがに虎のお寺ね。それに胎内巡りっていうだけあるわ」

「そう、良かった。じゃあ、これからどうする？お茶、それとも、ちよつと早いけどメシにする？」

「そうしたいけど、ごめんね。ちよつと無理」

「どうして」

「これから帰って、もう一度、例の記事を、自分なりにまとめてみるの」

「えー」

不満顔の将大を尻目に、咲妃は舞台の手すりを持って、奈良を一望した。

元旦だとは思えないほど、暖かくさわやかな風が咲妃の頬をなでる。

青空を見上げて咲妃はつぶやいた。

「もう迷わない。約束よ、マホちゃん」

〈了〉